月例研究報告

かわいそうなLily
——20世紀初頭米国の貧困問題

石渡　周二

Edith Wharton（1862-1937）は19世紀末から20世紀初頭に活躍した米国の作家である。New Yorkの上流階級の家庭で生まれ育ち、多作の小説家だったが、詩集もふたつある。その他、19世紀末以前のNew Yorkを回顧する自伝的エッセーや旅行記、室内装飾に関する著作もある。代表作を３つあげれば、世に文名を知らしめたベスト・セラー *The House of Mirth*（1905）は出版後一年で14万部以上を売り上げている。*Age of Innocence*（1920）も２年間で数十万部に達したというが、1921年にPulitzer賞を受けた作品である。そして*Ethan Frome*（1911）になるだろう。1908年からフランスにたびたび長期滞在するようになり、1913年にはフランスに移住した。第１次世界大戦では難民支援・慈善活動に積極果敢に従事、フランス政府からレジョン・ドヌール勲章を受けている。ノーベル文学賞の候補にもなり、受賞すれば米国で同賞を受けた最初の作家になっていたが、その名誉は1930年のSinclair Lewに譲っている。

Whartonが書き始めたのは、のちに「金ぴか時代」（the Gilded Age）と喧伝された時代で、南北戦争（1861-65）後から1873年に始まった不況をへて1893年の大不況までをさす。米国はこの時期、産業資本を中心に急速に成長をとげ、1880年代には立派な経済大国となり、鉄鋼、石炭の生産で英国を追い抜き、世界の工業生産の３割を占めた。その陰で、腐敗と金権政治が横行し、拝金主義が蔓延した時代でもある。経済の急成長とともに、鉄鋼王Andrew Carnegie、石油王John D. Rockefeller、銀行王J. P. Morganなど、伝説的な大富豪が続出したが、こうした大資本家が政府と結び、汚職や政治への介入が続くなど独占資本の弊害があらわになる。天然資源の乱掘・不正取引・労働者の搾取などにより財を成した悪徳資本家・企業家には「泥棒男爵」（Robber baron）という異名がつけられ、やり口のひどさを示している。その一方、没落する者も巷にあふれ、下層の人々は貧困に喘いだ。そもそも「金ぴか時代」ということばも、不正と腐敗の中で富裕層や成金が跋扈した世相をMark Twainが皮肉を効かせて書いた友人と共著の風刺小説のタイトルからきている。「メッキであって芯まで金ではなく、金であるかのように金ぴかに粉飾した時代」と読める。

Whartonが活躍した時代は「改革の時代」（the Progressive Age）でもある。前述したような状況に対する米国社会からの揺り返しというべきか、1890年代から1920年代にかけて、社会と政治の改革が著しく進んだと歴史学では位置づけられている。さまざまな社会改良運動がおこっている。それには貧困が国家的な広がりをもつ問題であるという認識の高まりがあった。国全体の社会問題とするのに蓋をしていた奴隷制の終焉により深刻な社会問題となった。貧困が裾の広い危機として認識され、いわゆる慈善団体の発足や「セツルメント」（settlement）などの隣歩事業から、救済を制度化し、貧困の温床とされるものを改革しようとする公の動きまで、さまざまな反応が生まれた。改革の時代は「社会的福音」（Social Gospel）、すなわち、キリスト教の教えによる社会の改革を固く信じる動きに触発された社会福祉事業のボランティア活動、そして貧困の広がりの輪郭を示し、明確にする社会学的知見の成長が見られた時代である。統計的な研究は、仕事と貧困が離れがたい状況である産業プロレタリアートの姿をあぶりだした。南欧・東欧からの大量の移民の流入に目

が向けられ、彼らが居住した過密状態の安アパートtenementsは、都会のむさくるしい貧民地区の生活に対する中間層の見方を決定づけた。1870年代と80年代にはホームレスが広く知られる問題となった。南北戦争やその後の一連の景気停滞によって行き場を失った圧倒的に男性で押しの強い放浪者や浮浪者があふれた。南北戦争後も繰り返した景気循環の中で1890年代には大不況を迎え、とりわけ1893-4年の冬には危機的な状況となり、失業、職を失うということが、個人の持つ欠陥の結果ではなく、産業資本主義に内包する問題であるという認識が広がることとなった。この時期でも生活水準が向上した労働者は存在したが、経済的搾取や生活不安、不平等がことごとくアメリカの地にはびこっているという感情が広まっていくことは止めようがなかった。

こうした状況に作家たちも反応を示している。1890年代にWilliam Dean Howellsは、貧困がアメリカの持病である、と喝破した。これはHowellsにとって、不条理で途方もない貧富の格差にその本質があり、富の所有を自明の事実とするイデオロギーによって強化されたものだった。この両者があいまって、すべてのアメリカ人に貧者に対する侮蔑と自らも知らぬ間に明白な下位に陥るのではという不安を生み出していた。

明日への不安を反映したジャンルに階級横断を描くものがある。中産階級の人間が労働者階級や貧者の身なりをして、階級差の文化的性質を理解し、貧窮というものを自ら経験しようとしたのである。例えば、Alvan Sanbornの小品集*Moody's Lodging House*（1895）ではドキュメンタリーと純文学に共通する必要を明らかにし、このような生活の中に入り、身体的にも心理的にも生まれ変わることによって、あのJacob Riisの不朽の言葉（1890年に刊行した著書*How the Other Half Live*のタイトル自体が示しているのだが）、自分とは違う下層階級の人々がどう生きているのか、把握しようとしたのである。階級横断の記録というジャンルはWalter Wyckoffの*The Workers*（1897-99）のような作品によって確立されたが、その暗黙の想定の多くは1881年に刊行されたMark Twainの子供向けのファンタジー小説*The Prince and the Pauper*によって一般に知られるところとなっていた。こうした作品は、富む者と貧しい者との間に共通の人間味を見いだそうとするが、物語の終わりでは階級の間に適切な隔たりをおくことが必要であることを示唆する点で通底している。中産階級が貧者に向ける関心は貧困の悲惨さと不当なことを明らかにし、時には下層階級がみせるたくましい生活力に喜びながらも、civilizeされていない野卑な振る舞いに対して脅威を感じる上品な階級の優越性を正当なものとするのである。これは女性労働者を描いた女性作家に特に当てはまる点である。

その点、今回とりあげたWhartonの*The House of Mirth*は特異な存在である。上流社会出身のヒロインはある女性労働者の邂逅によってその女性の生の在り方にある種の人間性の回復を得て死んでいく、New Yorkの上流社会でもよい家柄に生まれながら資産のない女性、Lily Bartの物語である。社会的にも経済的もよい縁を得るように育てられ、並外れた美貌に恵まれながら、結婚しないまま29歳を迎えている。容貌の衰えと結婚への見通しが限られてきていることを意識し始めていた彼女は、上流階級の特権を満喫する立場から次第に社会の片隅に追いやられ、ついには孤独な死を迎え

る。31歳のはず。彼女は、かつて自分がふと示した慈善心の発露によって（おそらく結核にかかり）困窮のなかで朽ち果てていくしかない若い女性を助け、サナトリウムへ送り込む手立てを講じたことがあった。物語の終末で、Lily自身がいかんともしがたい貧窮のどん底にあった時、その女性Nettie Strutherに文字通り温かい手を差し伸べられて一息をつくのだが、Nettieにつれられて彼女の自宅につれていかれる。それは下層労働者が住む安アパートの一室で、Lilyに助けられたNettieが人生の新規まき直しを果たした末に獲得したものである。

> その働く若い女性は粉々になっていた自分の人生をなんとかかき集め、それをもとに自分に居場所をつくっていたのだが、そうしながら生きるということの核心に到達したようにLilyには思えた。それは確かに過酷な貧困との境目にのったカツカツの生活とはいえ、断崖のふちに営まれた鳥の巣が見せる、弱々しくも大胆不敵な堅固さがあった。木の葉とワラのかたまりにすぎないにしても、それに身をゆだねた生命が崖のふちに安全にぶら下がれるようにできていた。
>
> まさにそのとおりだろう。だが、巣をつくるには女の勇気だけでなく、男の信頼のふたつが必要だったのだ。LilyはNettieの言葉を思い出した。あのヒトが私のことを知っているのは私わかっているんです、と言っていた。夫の彼女に対する信頼が彼女の生きかえりを可能にしたのだった。（*The House of Mirth,* 248－49）

自分の人生の来し方のすべてを理解し、受け入れた相手に飛び込む勇気こそが必要なものだというのだろう。だが、社会的な装飾品となるべく育てら、生きることとはそうすることとして日々をすごしてきたLilyにはその勇気もなければ、Lilyの人間性に関心を向ける男たちは彼女の周辺には存在していない。上流社会というものの在り様に対する根源的な批判となっている。

なお、Lilyが対峙する男性のひとりにLawrence Seldenがいるが、Lilyに心を寄せるようでありながら、結局離れていき、ヒロインの生がほぼ終わった段階でまた登場する。彼自身財力はないが、弁護士という社会的地位をもつ者として上流社会を自由に出入りする存在であることからも、むしろ作者の代理人（！）として狂言回しを演じていると解釈すべきだろう。

作品の表題は聖書の「伝道の書（コヘレトの言葉）」7章4節の“The heart of the wise is in the house of mourning; but the heart of fools is in *the house of mirth* (my italics)”（「賢者の心は弔いの家に。／愚か者の心は**快楽の家**に」）からとったものである。

参考文献

Wharton, Edith. *The House of Mirth.* 1905. New York: W. W. Norton, 1990

別府 恵子編著『イーデス・ウォートンの世界』鷹書房弓プレス、1997.

野村 達郎著『アメリカ労働民衆の歴史』ミネルヴァ書房、2013.

ヴェブレン、ソーティン（訳 高 哲男）『有閑階級の理論 増補新訂版』講談社学術文庫、2015.

木村靖二他監修『詳説 世界史図録』山川出版社、2014.

Hofstadter, Richard and Beatrice K. Hofstadter. *Great Issues in American History*, Volume II , Revised edition. New York: Vintage, 1982.

Howells, William Dean. *Impressions and Experiences*. New York: Harper, 1909.

Jones, Gavin. *American Hunger*. Princeton, NJ: Princeton University Press, 2008.

Riis, Jacob A. *How the Other Lives: Studies among the Tenements of New York*. 1890. New York, Dover. 1971.

Sanborn, Alvan. *Moody's Lodging House and Other Tenement Sketches*. 1895. Boston, MA: Copeland and Day, 1995.

Trachtenberg, Alan. *The Incorporation of America: Culture and Society in the Gilded Age*. New York: Hill and Wang, 1982.

Twain, Mark. *The Prince and the Pauper*. 1881. Harmondsworth: Penguin, 1997.